

まことのぶどうの木であるイエス

ヨハネ福音書15:1-6

【新改訳 2017】

- 15:1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です。
- 15:2 わたしの枝で実を結ばないものはすべて、父がそれを取り除き、実を結ぶものはすべて、もっと多く実を結ぶように、刈り込みをなさいます。
- 15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、すでにきよいのです。
- 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。
- 15:6 わたしにとどまっていなければ、その人は枝のように投げ捨てられて枯れます。人々がそれを集めて火に投げ込むので、燃えてしまいます。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「実を結ぶ」とはどういう意味ですか。
- (2) 2節の「枝で実を結ばないもの」について三つの解釈を説明して下さい。
- (3) 私たちが「主にとどまり続ける」には、具体的にどうすればよいですか。

【解 説】

(1) まことのぶどうの木

旧約聖書の中には、イスラエルの民のことを、「ぶどうの木」に例えている箇所が沢山ある（詩篇80:8、エレミヤ22:1、エゼキエル15:2、ホセ7:10等）。

「あなたはエジプトからぶどうの木を引き抜き異邦の民を追い出してそれを植えられました。」（詩篇80:8）

ところが、彼らは、主の期待に背いて、悪質のぶどうに変わってしまった。そこで主は、「わたしはまことのぶどうの木」と言われて、「ぶどうの木と枝の関係」で、「キリストと信者の結合は極めて強い関係」であることを比喩的に教えておられる。



(2) 実を結ぶとはどういう意味か

「実を結ぶ」とは、具体的に何を意味しているのか。文脈から考えて、最も自然なのは、「御霊の実」を結ぶことである。つまり、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」である（ガラテヤ5:22-23）。

これらは、御霊の賜物（Iコリント12:4-6）の場合とは違い、みんながこの同じものを持つ。御霊の賜物は異なっているが、御霊の実はずべてのキリスト者が程度の差こそあれ、みな持っているはずである。

キリスト者でも、愛のない人、喜びのない人、平安のない人、寛容でない人、親切でない人、善意でない人、誠実でない人、柔和でない人、自制心のない人がいても、驚くにはあたらぬ。そういう人は、主に強く結びついていないから、実を結ぶことがない。たとえ結んでも、貧弱な実しか結ばない。

しかし、これは他のだれかではなく、「自分自身がどうなのか」と反省してみるところから始めなければならない。主は言われた。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」

(3) 「枝で実を結ばないもの」とは

「ぶどうの枝」において大切なことは、実を結ぶか結ばないかということである。実を結ばないものは、父なる神がそれを取り除いてしまわれる。ここで三つの解釈がある。

- ①「枝で実を結ばないもの」を、偽の信仰告白者であると考え。キリスト者のふりをしているが、本当の意味ではもともと信仰によってキリストに結びついていない人であると解釈する。
- ②これは本当のキリスト者ではあるが、実を結ばなかったために救いを失った人と考える（アルミニアン主義）。この見解は成り立たない。信じる者には永遠の救いが与えられる、という他の多くの個所と矛盾する。
- ③これは本当のキリスト者ではあるが、「信仰の後退者」となった人のことであると解釈する。この解釈が正しいと思われる。主から離れ、この世のことに深入りする人である。

(4) 実を結ばない枝に対して父なる神がなされること

2節で「取り除き」と訳されている言葉 φέρω (フェロー、cut off) は、「刈り込み」とも訳される（ヨハネ1:29/「世の罪を取り除く」でも同様に訳されている）。

枝がどうして実を結ばないかと言うと、幹に強く結びついていないからである。幹に強く結びついていれば、必ず栄養分は幹から流れてきて、実を結ぶ。

主は、私たちに実を結ぶことを期待しておられる。しかも、多くの実を結ぶことを望んでおられる。だから、余分な枝を切り取って、実を結ぶ枝だけにされる。それを、剪定とか刈り込みと言うが、これをしないと、余分な枝に栄養分が行ってしまって、貧弱な実しか結ばない。主が次のように言っておられる通りである。

「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」

剪定はそこに痛みを感じる。これは、私たちキリスト者にとっては、訓練を意味し、具体的には苦難や試練という形で、私たちの身の上で起こってくる。だから、私たちキリスト者は、自分の身の上で苦難や試練が襲ってきた時、だれかを恨んだり、自暴自棄になったりすべきではなく、むしろ主が、私たちにさらに多くの実を結ぶために与えられたのだということを知って、感謝しなければならぬ。このあたりの受け止め方いかんで、多くの実を結ぶ人になるか、貧弱な実しか結ばない人になるかの分かれ道となる。

(5) 接ぎ木されたのはいつか

私たちは主イエスの十字架の贖いを信じた時、キリスト・イエスの内に入れられた（Iコリ1:30）。これが私たちの立場である。この立場に立ち、日々の生活において、主との親密な交わりにとどまらなくてはいけない。それは、比喩的に言えば、枯れ枝のような存在であった者が、「いのちの主」であるぶどうの幹に接ぎ木されたのである。

しっかり幹にくっついていれば、幹から流れ出てくる栄養分によって、どんどん育ち、実を結ぶことができる。私たちがしなければならないことは、自分のいのちの成長のために、自分で栄養分を地中から吸い上げたり、幹に働きかけて、もっと栄養分を供給してくれるようにすることではなく、幹に強く結びついていけばよい。

実を結ぶ努力すらする必要はない。しかし、ある人々は一生懸命になって実を結ぼうと努力している。そんな必要は毛頭なく、幹であるキリストに強く結びついていさえすればよい。主が実を結ばせてくださる。

(6) 主に強く結びつき続ける方法

私たちは主イエス・キリストによって、主と強く結びつけられた。しかし、それで十分なのではない。「強く結び続ける」必要がある。それがここで、主が、「わたしにとどまりなさい。」と言っておられることの意味である。

一度主と結びつけられたら、その事実を立て、主との交わりを持ち続けなければならない。その事実の上に安住してはいけない。主に強く結びついているために、私たちは毎朝主との交わりを持つこと（ディボーション）が必要である。これをしていない人、あるいは、していたとしても、いいかげんにしている人は、いつしか主との結びつきが揺るぎ出してくる。それは、実を結ばなくなることによって、誰の目にも明らかになる。

主がここで、「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。」と語られた。私たちが主に心を向け、主の助けを求める時、主が私たちを助け、守り、いのちの実を結ばせてくださるのである。「主を第一にする人」を、主もまた大事にしてください。

もしも私たちがこの主の御言葉をいいかげんに聞いているなら、主は次のように言われる。

「わたしにとどまっていなければ、その人は枝のように投げ捨てられて枯れます。人々がそれを集めて火に投げ込むので、燃えてしまいます。」

「投げ捨てられて」とは、この世の人々から嘲られ、その人の評判に泥を塗り、キリスト者としての証しを火の中に投げ込まれることを意味する。このように投げ捨てられないために、私たちは主に強く結びつき続けよう。